

「生徒」と「自分」の 社会参加の在り方を 考えてほしい

学校法人桐蔭学園 理事長代理
桐蔭学園トランジションセンター 所長・教授
溝上 慎一

みぞかみ・しんいち ●京都大学博士(教育学)。1996年に京都大学高等教育教授システム開発センター助手に。同大講師、助教授(のち准教授)、教授を経て、2018年9月より現職。専門は心理学(現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化)と教育学(生徒学生の学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション等)。著書に『高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題―』(学事出版、責任編集)ほか多数。

2018年に京都大学から桐蔭学園に移られた溝上先生。

世間には驚きをもって受け止められました。

「ご自身は「大きなチャンス」ととらえているそうです。

そうした言動の根底にはどのような哲学があるのでしょうか。

社会の中で「生徒」や自分を含む「教員」はどうあればいいかを

問いつける溝上先生に、これからの在り方を伺いました。

どんな社会人が苦勞しているか その現実を直視してほしい

講演で「どの生徒も協働での問題解決ができるようにならないといけない」といった話をする、先生方から「おとなしく一人で真面目に勉強する子の性格も認めてあげたい」といったコメントをよく受けます。

私は大学教員として、また2015年からは桐蔭学園の教育顧問としても、学校を児童・生徒・学生がもつと学び成長する場に変えられないか、研究や実践に取り組んできました。その経験からこれだけは申し上げたい。対人関係が弱く受け身な生徒を、真面目だから「それでいいよ」とする考えは改めてほしい、と。

なぜなら、そうした子ほど社会で苦勞しがちな現状があるにもかかわらず、個性として認めたいという理由をもつて、協働や探究をする力を「育てる」対象から確信的に除外しているからです。

「つデータをあげさせてください。25〜29歳の社会人への調査で、個性をとらえる3因子をもとに、5つのタイプに分類し、各タイプの職場での状況をまとめたものです(図1)。「外向性」とは、他者や集団に向かう傾向のこと。「開放性」とは、経験への開かれ、

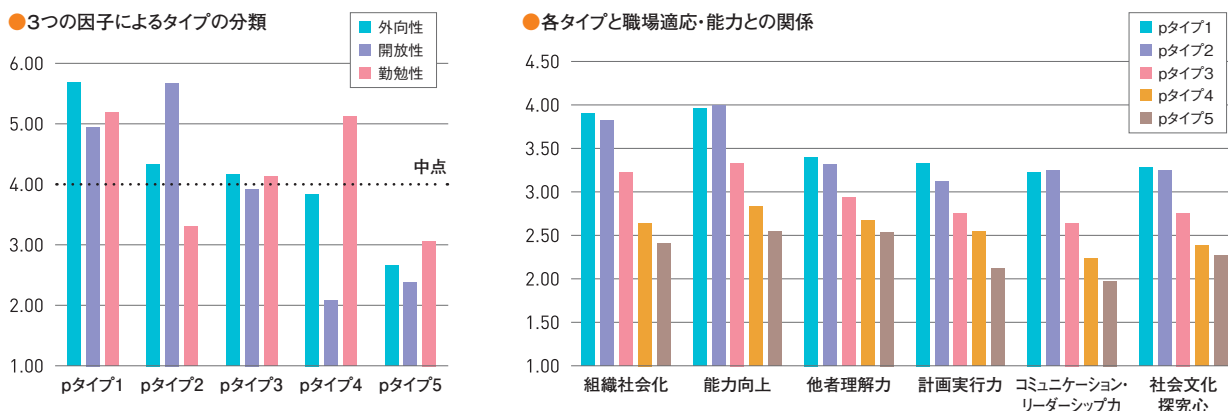
いわば新しい物事に向かう姿勢で、好奇心や探究心に近いと言えます。「勤勉性」とは、物事に一つひとつ真面目に取り組む傾向のことです。

ご覧のとおり、タイプ2——開放性が高く、外向性はそこそこで、勤勉性が低いタイプは、すべてが高いタイプ1に迫るほど、職場で活躍できています。もちろん、このタイプは勤勉性をもう少し高めるべきですが。他方で、タイプ4——勤勉性は高いものの、開放性や外向性は低いタイプは、すべてが低いタイプ5と同じぐらい、職場で苦惱しているのです。

学校教育は何のためにあり、私たちはなぜ教員になったのでしょうか。それは、生徒や学生が将来力強く仕



図1 社会人のタイプと職場適応・能力との関係



(出典)溝上慎一・電通育英会共同調査「トランジションの観点から見た社会人のパーソナリティタイプと職場適応・能力との関係」(25-29歳の正規雇用社会人を対象)(未公開)

個性を理由に「育てる」対象から除外していかないか

事し、社会生活を営めるようにするためではないのでしょうか。

数十年先まで見据えたとき生徒には何が必要になるか

協働や探究をする力は、社会の変化とともにますます必要になります。具体的に社会がどのように変化するかは、2016年に出された学習指導要領改訂に向けた答申(※1)や、2018年の高等教育のグランドデザインの答申(※2)で示されているので、私からは世界最速で進む日本の少子高齢化も課題になる、という一点を共有させていただきます。

数十年後には、日本の生産年齢人口(15〜64歳)が5000万人を切るという予測されています。これは高度経済成長期よりも前の時代と同じ規模で、しかも以前は働き盛りの層が多かったので社会が活気に満ちていましたが、訪れる未来は、高齢者層も5000万人いる社会です。

税収は減り、行政サービスの維持が難しくなり、各地で医療や交通、モノの流通に支障が出る恐れがあります。そのなかで皆でどう生活を営むのか。社会的に解決しなければならぬ問題だらけになるのです。

生徒たちの20年後や30年後を見てほしいんですね。その未来を思い描いたとき、「話すのは苦手だが個人でよく考えている」「知識の習得は得意だ」で済ませてよいのでしょうか。

私は別に「全員が素晴らしいパフォーマンスになれ」と言いたいわけではありません。発達障害やその可能性のある生徒など、協働学習を行うには配慮が必要になる生徒もいます。生きづらさを抱える人をはじめ、すべての人が排除されないよう社会で共に助け合うという、ソーシャルインクルージョンの理念も大事です。

とはいえ、一人ひとりが社会的な問題と切実に向き合わねばならない現実がある以上、少なくとも「自分の考えをもち」「人と一緒に意見を出したり受けとめたりし」「協働したことを個々に振り返る」ことは、どの生徒

や学生もできるような支援するのが、教師の仕事だと思うのです。個の活動から協働の活動にすべて切り替えるわけではなく、個と協働のバランスが大事。そして協働ができてこそ、個の力も生きてきます。

大学からでは資質・能力がなかなか育たない現実がある

このような声を耳にすることもあります。「コミュニケーション力や探究心は大学で開花させればよく、高校はより良い大学に行くための受験勉強に専念すればいい」と。

しかし、そうした資質・能力というのは、基本的に積み上げで段階的に発達することを知るべきです。

私は2013年より、京都大学高等研究開発推進センターと河合塾の共催で「学校と社会をつなぐ調査」、通称「10年トランジション調査」に取り組んできました。調査開始時に高校2年生だった全国の4万5000人を、10年間追跡する調査です。大学3年生になるところまで調査分析が終わっているのですが、その結果から、資質・能力は大学ではなかなか育たず、高校2年生の秋ごろまでにある程度仕上がるのがわかりました。また、偏差値上位の大学ほど資質・能力の高い学生が多くなることは特にあり

(※1)中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(2016年12月21日)
(※2)中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」(2018年11月26日)

「この子は無理です」ではなく 一歩でも成長を促したいのです

ませんでした。

ですから、高校で受験勉強に専念し過ぎると、伸ばすべき時に資質・能力を伸ばせず、進学先で苦勞する可能性があります。事実、私は大学で、内に秘めたものはあっても自分を表現できずに、見殺しになっていくとおぼしき学生を目にしました。そうした子どもたちの学びと成長をどう支えるかが、私の今の課題であり、日本の教育の課題でもあります。

一歩でも前に進めるよう 生徒の主観的成長も重視して

高校の先生方としては「生徒のなかには小中での積み上げがなく、高校からコミュニケーション力や探究心を伸ばそうにも難しい子がいる」と言いたいこともあるでしょう。これはそのとおりで、高校現場は確かに下からのツケを回されています。例えばしゃべれない子を小中の先生がさわらずにきた場合、高校で劇的に話せるようになるケースは稀です。

ですが、そうした生徒の「主観的成長」を促すことはできます。高校

3年間の学習を通して、客観的評価としてはコミュニケーション力や探究心が低いままでも、本人が一歩でも「成長した」と思えるように支援するのです。野球に励む生徒が、実力的にブ口はもう目指せなくても、練習のなかで自分の成長を感じ、自信や達成感を得ると同じように。その成長は間違いなく前進なんです。

毎年足を運んでいる高校で、グループワークに全然参加しない1年生を見かけたことがあります。先生に尋ねると「彼女は話すのは無理なんです、でも成績は良いので進学できます」といや、それでは本人が困るのだとお伝えしました。その彼女とは、3年生になったときに授業で再会できたのですが、ドキドキしながら見ていると、ペアワークで隣の子とちゃんと会話をしていたんですよ。

実はこの話には続きがあって、その子は特定の子とは話せるようになったものの、元気な子と組むと萎縮してまだ話せないそうです。でも、彼女は逃げずにここまで来た。この先もしんどい局面はあるでしょうが、前に進

んだ彼女であれば、大学でも積み上げていきますし、そうした子どもたちをどう社会につなげていくかを考えるのが大学の課題になります。

幼小中高大の学びをつなぎ 学校をハブに地域創成を

学校で学習し社会で仕事や生活をするようになるまでのトランジション(移行)に、これほどの課題があるなか

で、私は「学校教育」と「人の発達」をバラバラにせず統合する理論や実践を、それぞれの現場に関わりながら模索したくなりました。

2018年秋に、京都大学教授を辞し、桐蔭学園トランジションセンター所長・教授に就任した一番の理由がここにあります。桐蔭学園は、幼稚園から小学部、中等教育学校、中学校、高校、大学まである学校。ここを拠





点に、幼稚園から大学までが、どのようにバトンを渡していけば、児童・生徒・学生の力強い学びと成長を促せるか、研究したいのです。

合わせて構想していることがありません。学校を、大人にとっても、自身のキャリアや地域・社会への関わり方を考える場として機能させることです。桐蔭学園には生涯学習センターがあり、地域の大人たちの学びの場にもなっていましたから。学校がどの世代にとっても学ぶためのハブになり、その学校での活動を通して地域・社会を変えていく。そんな学校機能の拡張を目指したいのです。

こうした仕事は、今後立場が変わっても、定年を迎えても、続けていくたいですね。頭と体が動くかぎり、ずっと研究者でいたいので。

自分の人生をどうしたいのか 社会参加を念頭に考えたい

似たような気持ちは先生方にもないでしょうか。なぜ仕事をするのかといえ、まずは義務感が先立つかもしませんが、仮に給与がなくても社会的な関わりをもちたい、という思いはあるはず。定年後はのんびりしたいという先生もいますが、1年も経たず飽きると思います(笑)。

人生100年時代。先は長いですが、生徒だけでなく私たち大人も「社会参加」の意識をもうちよつと強め、できることをみんなでやりませんか？ 所属先の名刺や肩書とは別に、地域活動でも国際協力でも何でもいいのか、自分が社会にどう関わりたいかを言い表す「二枚目の名刺」を作る、

仕事は義務感だけでやるのではない あなたは社会で何がしたいですか？

という意識で。要は、社会的存在たれ、ということですね。

では社会参加の歩として何から始めるか。学校現場にいるなら、私は「アクティブラーニング型授業への転換」という、わかりやすい障壁に挑むのがよいと思います。その取り組みを通して、生徒の資質・能力を高めることを本気で目指します。

生徒は将来さまざまな社会的な問題と向き合うわけですが、教育改革はまさに教員にふりかかった社会的な問題。生徒たちに範を示せるよう、私たちがまず問題解決に挑むのです。

壁を乗り越えるのは容易ではありません。私も桐蔭学園で、先生と二緒に高校生のゼミを始めたのですが、脱落者が出たり、理解したはずのこと

が定着していなかったりと、課題だらけです。そうなった原因は、私がまだ高校生の心をわかっていないこと。

そしてチームを組んだ経験豊富な先生でさえ、躓いている生徒の支援には悩んでいることでした。

ですので、今はゼミの生徒たちそばで現時点の学びのプロセスを観察し、そこにどんな支援をすることができか考えているところです。

高校の先生は教科の専門家であり、私も心理学と教育学という専門分野をもつていますが、お互いに知らないことはまだまだたくさんあります。わからないことは生徒と二緒に学び続ける姿勢が大事だと思っております。私たちも成長を続けて、社会のためにできる仕事をしていきましょう。



桐蔭学園には、幼稚園から大学(桐蔭横浜)まである。写真は、園児と一緒に芋掘りをした翌日、一人ひとりから成果報告を受け、感謝状をもらったときのもの。園児にとっては溝上先生への発信が学びになっている。